

参考文献(主)

- 『万葉集一・二・三・四』日本古典文学大系 岩波書店  
『大伴家持三・四・五』中西 進著 角川書店  
『家持を考える』上代文学会編 笠間書院  
『大伴家持研究序説』針原 孝之著 桜楓社  
『大伴家持作品論説』佐藤 隆著 おうふう  
『万葉植物新考』松田 修著 社会思想社  
『万葉植物事典』山田 卓三他著 北隆館  
『和歌植物表現辞典』平田 喜信他著 東京堂出版

歌われており、しかも作者の多くは名もない農民であった。その大らかな歌いぶりを筆者は万葉集の原風景を見る思いであると述べた。ところが、今回の越中万葉を家持の歌を中心に考察してみると、同じ木や花を詠むにしても東歌の場合とは全く異なる。まさに植物そのものの美しさを歌い上げている。そこには万葉びとに共通の喜び、悲しみやさまざまな感動が植物に託されている場合もある。季節の推移をはつきり示す植物の姿が、人間の心に深くかかわっていることを歌人たちは巧みに表現している。勿論、地域性や生活状況の違いのある東国の人びとと都びとは同一視できない。まして官人であり、優れた歌人である家持の作品と東歌を同一の視点から比較することも、たとえ同じ植物を詠んだ歌であってもそれは無理といわざるを得ない。

さて、家持は越中という都から遠く離れた地にあつて、限らない孤独感、空虚感を味わつたに違いない。しかし、歌うことによつてそのような心情を止揚し、克服していったものと思われる。初めて目にする越中の自然や風物に家持はどれほど感動したことだろうか。多くの歌がそのことを物語っているが、都の友人や、自分をとりにくく身近の人びとの交流に歌で心情や用件を伝える時、必ずといってよいほど植物や自然を詠んでいる。自然にひたり切っていた家持にとつて、二上山、布勢の水海、立山をはじめ、奈吾の海、洪谿、三島野、石瀬野、射水川、雄神川などは自然詠の格好の対象であつた。そこに咲く野の草花、季節の到来を象徴する花や木々にも家持の目が向けられた。土地の人から教えられて知つたであろうかたかごの可憐な花や、つままのような大木、あるいは現代人にもあまり知られていない寄生木ほよにも興味関心を寄せた。

「大伴家持研究序説」の著者針原孝之の調査によると、自然観照の歌も多く残した家持の歌で、雨・風・霞・霧・月という天然現象を詠んだものが一七〇例、動物が一六三例で、植物は三二五例と、詠まれた景物としては圧倒的に多いという。

植物は家持の歌の素材として極めて重要なものであつたことは確かである。庭に草花を植えて楽しんだのは家持だけではない。官人には閑人、風流人が多く、このようなことは誰しも好んだことだろう。しかし、家持は若い頃から庭に藤・尾花・梅・橘・竹など四季折り折りの草木を植え、時々の思いを詠んでいる。それが越中へ来てからも続く。館の庭にまでしこや桃、李の花にある時は率直な感動を、ある時は恋の喜びや離別の悲しみを託した。歌の内容、題詞、左註などからそれらが十分理解される。

本稿の冒頭に述べたように、いわゆる越中万葉における家持の歌の存在感は極めて大きい。多感な青年国守家持は歌でもつて折々の気持を表現していたことがよくわかる。歌人だから当然といえばそれまでだが、その際、身近かな草や木をごく自然に詠みこむことを決して忘れない。それは単に心の慰めや都への思い、寂寥感を癒すためなどという何かの手段としてではない。本心から自然が好きであり、とりわけ、草木を格別に愛好したからついで口をついて出てくるのだろう。

家持の植物詠歌はかりそめのものではない。たとえ、類歌であれ、譬喩歌であれ、詠みこまれた植物への思い入れは誰よりも強かつた。家持は万葉歌人の中で、最も草木を愛した歌人であつたといえよう。(完)

現在はヤマハギ・ミヤギノハギ・キハギ・ニシキハギ・シラハギなどと分類されているが、万葉の昔はハギといえば、ヤマハギであった。落葉性の低木で山野に自生する。葉は小さく、秋に房状の花が咲く。

#### 四、おわりに

越中万葉の中での植物詠歌を、大伴家持の歌を中心に考察をすすめて来た。本稿(上)の最初に表で示したように、越中万葉歌三二五首のうち、一三一首に植物が詠まれているが、そのうち、家持は九四首に植物を詠みこんでいる。ということは越中万葉の全植物詠歌に占める家持の植物詠歌は四二パーセントということになる。家持が越中の風物、とりわけ、草木や花に対していかに興味関心が高かったが理解できる。このことについては後述するとして、植物の種類としては草木類、木本類合わせて三七種類となるが、本稿では二六種類をとりあげた。残りの十一種類についてとりあげなかったのは、先に「東歌における植物詠歌の考察」(紀要第二十七輯から第三十四輯)でとりあげたので今回は重複を避けることとした。その十一種類とは、草木類では、あし・すげ・すすき・も、の四種類であり、木本類では、あづさ・すぎ・たちばな・はり・ふぢ・まつ・やなぎ、の七種類である。このうち、たちばなは越中万葉の中では最多の十七首に、ふぢは十五首に詠まれ、詠歌数では上位二位を占めている。たちばなは万葉集全体の中でもその詠歌数は六九首と第七位であり、多い。このたちばなは古代のミカン類の総称で、いわゆる

コミカンのことであり、今日のヤブコウジ科のカラタチバナではない。しかも六九首中の殆ど六二首がはなたちばなとして詠まれている。つまり、たちばなといえば五月に咲く白い花のイメージを万葉びとは思い描いていたものと思われる。また、初夏の花としては菖蒲と共に玉に貫いて邪気を払うため、かずらにしたりほととぎすを取り合わせて詠んだりしている。家持の二三首中、越中での作は十三首である。巻十九の四二〇七の長歌には「……わが屋戸やどの植木うゑき橘花に散る……」という表現があるところから、国庁の館の庭に植えて鑑賞していたことがわかる。

ふぢについては集中二七首詠まれており、越中万葉ではその半数以上の十五首が詠まれている。そのすべてが花の咲いた実景である。二七首のうち十七首が「藤浪」(藤波)としてふぢの花の形状を波に見立てて詠んでいる。このうち、ふぢの花の美しさを絶賛して詠んだ家持の次の歌は代表的なものであろう。天平勝宝二年四月十二日「布勢の海水に遊覧」した折の見事な作である。

藤波の影なす海の底清みしづく石をも珠たまとそわが見る(巻十九、

#### 四一九九)

・藤の花が波のように咲いていて、それが影を映す海の底が清らかなので、沈んでいる石まで珠に見えることだ。

さて、このように多くの植物が越中万葉に色どりを添えているが、先に東歌を考察した際には、その殆どの植物が修辞上の技巧として用いられて、東びとの植物に対する素朴な気持が、ある時は大胆に、また率直に

伊波世野糸 秋芽子之努芸 馬並 始鷹獵太糸 不為哉将別

・石瀬野に、秋のはぎを踏みしだきながら馬を並べて今年初めての鷹狩りをさえしなまに別れることでしょうか。

天平勝宝三年七月、家持は少納言に任官して越中を離れることになる。そこで別れを惜しんで、たまたま不在だった親友の久米広縄に歌を作つて残したのがこの歌である。広縄は下僚ではあったが、家持の越中在任中のよき作歌仲間の人であり、深い交遊があっただけに惜別の感もひとしおであったろう。この歌の背景には、前年に作つた鷹狩りの長歌四一五四がある。恐らくこの時広縄も一緒だったに違いない。

越中万葉はこの歌に続く家持の次の二首で終っている。

(ア) しな離る越に五箇年住み住みて立ち別れまく惜しき宵かも

(同、四二五〇)

・越の国に五年間も住み続けて、今こうして別れることが惜しく思われる今宵です。

(イ) 玉梓の道に出で立ち行くわれは君が事跡を負ひてし行かむ

(同、四二五一)

・都への道に出て、いよいよ出発する私はあなたの業績を背負って行きます。

(ア)は旅人の帰京に際して山上憶良が詠んだ歌を踏襲しているが、越の

国の自然や風俗に融け込んでいた家持の立ち去り難い心情が察しられる。

(イ)は射水郡の郡司との別れを具体的事象を盛りこんで詠んだものである。

さて、はぎであるが、はぎは植物を詠みこんだ万葉集の中で最も多く、一四二首に詠まれている。第二位はたへ(たく・ゆふ)の一三八首、第三位はうめの一一九首となっている。万葉びとがいかにはぎを愛し、賞でていたかがわかる。山野に自生するものや庭にわざわざ植えたものを詠んだり、時にははぎの花に秋の季節を感じ、また散るのを惜しんだり、あるいははぎの古枝、雨にぬれた花、風になびく様、はぎの紅葉、白露とはぎ、鹿とはぎ、雁とはぎ、など野趣豊かで秋の景物にびつたりのはぎの優雅な特徴を万葉びとの目はしっかりとらえている。

ただ、修辞上の技巧としてはなく、実景として美的観照の対象として詠んでいるのが殆どであるが、はぎを「秋はぎ」ということばで固定して詠んでいる歌が全体の半数以上の八六首もあるのはいささか典型的といえよう。

はぎの歌は越中万葉には家持作がこの四二四九の他に三首と、光明皇后作の一首四二二四の歌がある。しかし、この歌には河辺朝臣東人が伝誦したものとの注記がある。

ところで、はぎは漢字表記では「芽子」となっている。これははぎは古株から芽を出して増えるからだとされている。また、萩という漢字は秋草を代表するものだからということで作られた国字である。春の代表「椿」も同様である。漢名は一般に「胡枝花」があてられている。

・はぎ——マメ科

家持が、庭中花に感を発して、遠国に於ける寂寥の心を歌はうとして居ることは分るが、全体の構成が常識的である許りでなく、中心となる妻への思慕をあらはすにナデシコが、ソノハナヅマニサユリバナ ユリモといふ如き言葉の端の技巧を主として、それ以上深く這入れないのは低調といはざるを得ない。

たしかに一つの見方ではあろう。また、この歌が作られたのは天平感宝元年の閏五月だから、越中に赴任して満二年十一月で、「あらたまの年の五年………」という五年ではない。感違いかもしれないが、そうした思い違いがあつたにしても、歌そのものには自らの心を慰め、花を植え、妻を思う心情が率直に吐露されていることは否めない。遠く離れた都にいる妻を、越中の館の庭に植えたなでしこの花やゆりの花に重ねて偲ぶ。それは花のように美しい妻と単純に言っているのではない。山田宗睦が「花の文化史」で、この歌について長歌の中の「花妻」を「人間と植物との神聖な魂交わりをかかわらせている」とみて、「花妻とはたんに花のように美しい妻ではなく、花のように美しいが手をふれることの出来ない妻の意である」と述べていることに注目したい。たしかに、反歌には妻への思いが凝縮され、その少女つまり妻の初々しい微笑が淡紅色のなでしこの花の美しさと重って歌全体を官能的な美しさに結晶させている。この美しさを「にほひ」と表現しているところがいかにも家持らしいといふべきだろう。「にほひ」の用例は家持には極めて多い。四〇二一の「雄神川紅にほふ少女らし………」も然りである。ともあれ、なでしこは家持が特に好んだ花の一つであることは間違いない。

い。次の家持の歌はすべてこの事実を伝えているといえよう。

(ア) わが屋前のなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ児もかも  
(巻八、一四九六)

(イ) なでしこは咲きて散りぬと人は言へどわが標めし野の花にあらめ  
やも(同、一五一〇)

(ウ) なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもある  
かも(巻二十、四四四九)

・なでしこ——ナデシコ科

ナデシコの名は「大和本草」によると「撫子とは花の形ちひさかにて其愛すべきを以て名つく」とあるように可憐な花の様子にもとづいたもので、カワラナデシコは河原に生えるからで、ヤマトナデシコは唐撫子に対していったものである。低地や山地の日当たりのよい草地に生える多年草で、花は五弁であり、先が細かく切れ込み、筒状のがくがある。

## 26、はぎ

石瀬野に秋萩しのぎ馬並めて初鷹獵だにせずや別れむ(巻十九、四二四九)

もまた特別なものとして扱われ、神話伝説にも櫛をめぐる話が多い。

集中、つげのみえる歌はこの二首の他に四首あるが、「黄楊小櫛」が三首、「黄楊枕」が一首と、すべてつげで作った調度品として詠まれている。つげの木そのものではない。万葉以後の作品にも、櫛や枕の擬人化表現の歌がある。その多くは万葉集の歌をふまえたものである。

・つげ——ツゲ科

漢名では黄楊木。日本名のツゲのホンツゲはツゲの本物という意味でイヌツゲに対する名である。関東から本州の西、四国九州などの暖地の山林に生える常緑の高木。ツゲ材は黄色または淡褐色で極めて堅く、緻密で狂いが少なく粘り気が強く、現在でも定規、印在、彫刻材などに利用されている。

25、なでしこ

一本ひととのなでしこ植うゑしその心誰に見せむと思おもひそめけむ

(巻十八、四〇七〇)

比登母等能 奈泥之故宇恵之 曾能許己呂 多礼余見世牟等

・一本のなでしこを私が植えたが、その心はだれに見せようと思立たつたことだろう。(あなたに見せたい一心であつたのに)  
この歌には次の左注がある。

右は、先の国師の従僧清見京師みやこに入るべし。因りて飲饌を設けて饗宴す。時に主人大伴宿祢家持此の歌詞を作りて、酒を清見に送り。

いつ頃作つた歌か定かでないが、家持がせっかく先の国師の従僧であつた清見に見せようと思つて植えたなでしこの花が咲かないうちに去るのかと別れを惜しんで詠んだものである。

なでしこを詠んだ歌は集中に二十六首と多いが、憶良が秋の七種の一つとして詠んだり、万葉びと、特に都の人びとはなでしこを秋の野の代表的な花として鑑賞していたのだろう。二十六首中、十一首が家持作であり、その多くは実際に花の美しさを詠んでいる。十一首中、六首が越中万葉に入っている。次の二首は家持作の長歌と反歌である。

(ア) 大君の 遠みかどの朝廷と 任まき給ふ……………なでしこを屋戸に蒔まき生おほし 夏の野の……………(巻十八、四一一三)

・天皇の遠い田舎の役所として、ご任命になる……………なでしこの種をわが家にまいて育て、夏の野の……………

(イ) なでしこが見ることに少女をとめらが笑まひのほひ思ほゆるかも

(同、四一一四)

・なでしこの花を見るたびに、少女らの美しい笑顔が思われるよ。

いわゆる「庭中花詠作」の題詞のとおり作であるが、「私注」は次のようなきびしい見方をしている。

・すもも——バラ科

中国原産の落葉高木で、古く日本に渡来し、主に果樹として栽培された。「桃李の言はざれど下おのづから蹊を成す」や「李下に冠を正さず」などは中国の故事に由来する。四月に白い花をつけ、実は黄または赤紫色に熟す。

## 24、つげ

古いにしへに ありけるわざの……………いや遠しのに 偲しのひにせよと 黄楊つげ

小櫛せき しか刺さしけらし 生なひて靡なけり(巻十九、四二一一)

古余 有家流和射乃……………伊也遠余 思努比余勢餘等 黄楊

小櫛 之賀左志家良之 生而靡有

・昔あつたということ……………末長く偲ぶすがにしないとい、  
小さなつげの櫛をこのように刺したらしい。

この長歌には「追ひて処女の墓の歌に同ふる一首 短歌を并せたり」という題詞がある。処女の墓の歌というのは、昔撰津国葦屋の菟原処女うはなをとめが血沼ちぬ壯士をとこと菟原壯士うはなをとこの二人の男性から熱烈な求婚を受け、困つて遂に自殺するという伝説を歌つたもので、集中には田辺福麻呂の「葦屋処女あしやをとめの墓を過ぎし時に作れる歌一首 并せて短歌」(巻九、一八〇一の題詞)と、高橋虫麻呂の「菟原処女の墓を見たる歌一首 并せて短歌」(同、一八〇九の題詞)の二首がある。二人は実際に墓を見て詠んでいるが、

家持は実際には見ていない。越中であつてこの二首の内容を心に描きながら、菟原処女の死に追和した形で長歌と短歌を詠んでいる。なぜこのような歌を作つたか定かではない。内容から高橋虫麻呂の歌の影響が濃く出ている。虫麻呂の歌によると、中央に処女の墓を作り、両側に壯士の墓を作つた。中央の処女塚の木が血沼壯士の方になびいているので、血沼壯士が好きだつたのだろうと歌っている。しかし、この木がどんな木かは明らかではない。家持はつげの櫛を処女の墓に刺したらつげの木が生えて枝を風になびかせていると歌っている。

次は反歌である。

少女をとめらが後のしるしと黄楊つげ小櫛せき生なひかはり生なひて靡なきけらしも

(同、四二一一)

・少女の記念として刺した小さなつげの櫛は木となつて生えかわり、今は成長して風になびいているらしいよ。

「靡きけらしも」と結んでいるのは先の長歌で「古にありけるわざの奇なばしき事と言ひ継ぐ……………」と相呼応するもので、いかにも伝説的なことの表現である。

墓には昔は死者の命を伝えるため松の木を植えた。松は長寿の木だからであつた。しかし、この場合はつげの木である。つげもまた葉がつぎつぎに密についているという名前から長寿の木とされたとも考えられるが、つげの木は堅いのが特徴で、櫛をはじめ身の廻りの諸調度品の用材としてよく使われ、それらを死者と共に葬る風習があつた。櫛そのもの

## 23、すもも

わが園の李すももの花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも

(卷十九、四一四〇)

吾園之 李花可 庭糸落 波太礼能末 遺在可母

・あれはわが家の庭のすももの花だろうか、庭に散っているのは、それとも、庭に降った雪がまだ消えずに残っているのだろうか。

この歌は卷十九の冒頭の次の歌で、題詞の原文には「眺矚春苑桃李花作二首」とある、春の庭に咲く桃李の花を眺めて二首詠んだのである。したがって二首は一对の歌として味わうべきものであろう。

庭に降るの三句で切るのか。これが四句のはだれのかかるのかによって歌意が変ってくる。つまり、前者の場合は三句切れ、後者とすれば二句切れとなる。降るについては原文は「落」とあるが、花であれ、雪であれ、庭に降るのも散るのも意味上は変わらない。「全註釈」も「私注」「注釈」も三句切れとみている。しかし、だからといって直ちに三句切れとするのはいかがなものだろうか。実はこの歌には背景となっている歌が二つあって、一つは父旅人の次の(ア)の歌があり、もう一つは(イ)の駿河采女の歌である。

(ア) わが園に梅の花散るひさかたの天あめより雪の流れ来るかも

(卷五、八二二)

・わが家の庭に梅の花が散っている。これは大空から雪が流れてくるのだろうか。

(イ) 沫雪あわゆきかはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花そも

(卷八、一四二〇)

・あわ雪がはらはらと降るのかと思われるほどに、しきりに流れ散るのは何の花だろうか。

家持の頭の中にはこの二首の歌が当然あったと考えられる。とりわけ、(ア)には父の作という特別の思い入れがあっただろう。ただ、この歌は明らかに二句切れになっている。家持の歌の場合、問題となるのは、「はだれ」にある。「はだれ」が「庭に降る」を受けているのか、あるいは独立しているのかということである。情景として考えられるのは、すももの花が「はらはらと散っている」情景と、(イ)の歌のように「はらはらと降った雪が消え残っている」情景が二重になっている。家持の心象風景にはこの二つの情景が同時にあったと考えられないだろうか。とすれば「降る」(散る)は「はだれ」の修飾語とみるのが妥当と思われる。このことから、この家持の歌も旅人の歌と同様に二句切れとみたい。いずれにしても、すももの落花のいまだ清浄な真白な輝きを残雪に比して詠んでいる家持の心情を察するになぜか気だるさというか、凋落的なもの、孤独なものを感じざるを得ない。

すももを詠んだものは集中この一首だけである。



真澄鏡にはふたがついてることからふた上山にかかるという。このように長い序詞は家持の歌には珍らしく実に妖婉な美辞が使われているが、冒頭歌四一三九の幻想的な世界を背景に、巻十一の二五〇二の「真澄鏡手に取り持ちて朝な朝な見れども君は飽くこともなし」の歌を思い浮かべて詠んだものではなからうか。また終りの部分は巻八の一六四四の「引きよぢて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも」を模倣しているともみられる。桃の花を四一三九では少女との対比において、その美しさを実景をアレンジしたにしても美の対象として焦点化して歌った。その手法はここにおいても更に強調した形で、より幻想的、叙情的に歌っている。家持の美意識の世界はこのようにさまざまな歌の合成によつて構築されているといえる。それは勿論長歌だったから可能だったのだろう。

ももは元来、中国原産であつて、古く日本に渡来したといわれている。たしかに「古事記」には伊邪那岐の命が雷人に対し、桃の実を投げて撃退したという神話がある。古代人はうめやももは実を食べることを第一としたことだろう。特にももには邪気を払う霊力があると中国の古代民俗信仰は伝えている。しかし、これらの花を全く無視したとは考えにくい。万葉集にはももの花を詠んだ歌が七首もあり、紅の花はたとえ序詞としてであつてもやはり万葉びとにとっては美の対象であつたことは間違いない。

次に、先に「巻末の三首云々」と述べたので、付記しておきたい。

(ア) 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも(巻十九、四

二九〇)

・春の野に霞がたなびいて心は悲しい。この夕暮の光の中でうぐいすが鳴いている。

(イ) わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

(同、四二九一)

・わが家のわずかな竹林に、吹く風の音がかすかに聞こえるこの夕暮である。

(ウ) うらうらに照れる春日にひばりあがり情悲しもひとりしおもへば

(同、四二九二)

・うららかに照っている春の日に、ひばりが飛びかけ上がり、そのさえずりに心が悲しいことだ。ひとり物を思っていると。

なお、冒頭歌二首のうちの一首は次の「すもも」の項で述べる。

・もも——バラ科

中国では三千年以上も昔から栽培されていたらしい。日本へは弥生時代の遺跡から種子が出土していることから、古代から栽培されていた可能性がある。落葉高木で、花は三月から四月に咲き実は淡黄色に熟す。

## 22、もも

カタクリと呼ばれている。北海道から本州の林中に群生する多年草で、早春、地下茎から二十〜三十センチの茎を伸ばし、一對の葉を出し、紅紫色の花をつける。

春の苑紅えんこうにほふ桃の花うづも下照る道に出で立つ少女をとめ（巻十九、四一三九）

春苑 紅糸保布 桃花 下照道余 出立感嬢

・春の苑に紅の美しいもの花が照り映えている。その下を照らす道に立つ少女よ。

巻十九の冒頭歌である。この巻には長歌二三首、短歌一三一首、合計一五四首あり、家持の作は一〇三首で、越中在任中の約半数を占め、あたかも家持歌集の観がある。とくに、この歌を含めた冒頭の二首と、絶唱といわれる巻末の三首は見事であり、秀作が多く巻十九一巻に歌人家持のすべてが封じ込められているといっても過言ではない。

この歌は極めて色彩的、絵画的であり、表現の仕方も初句、三句、五句が体言止になっており、桃の花の紅のスポットを浴びた一人の少女を配して、いかにも立体的、印象的な構図になっている。「万葉秀歌」で、「何となく支那の詩的感覚があり、美麗にして濃厚な感じのする歌である」と斎藤茂吉が述べている。正倉院御物の「鳥毛立女屏風」に描かれ

た「樹下美人図」や薬師寺の吉祥天女像の濃彩艶麗なさまを連想することは多くの人の指摘するところである。

ここに詠まれた少女は土地の者であるとか、国庁に仕える女性であろうとか、あるいはこの頃、家持は妻を越中に迎えていたので妻坂上大嬢ではなからうかなど諸説があるが、誰であろうとかまわない。要は家持が目にしたある日ある時の貴重な感動体験がふと口をついて出ただけのことであつて、まさに花と少女が主体となつた自然諷詠の一こまである。桃の花と少女が一つにまとまつてそこに美の世界が描かれている。あるいは幻想であるかもしれない。事実、山本健吉や中西進はフイクションであると推論している。たとえそうであつても何ら問題はない。家持の詩的発想の中には現実、幻想、夢想の重なりがあつてさまざまな感動に触発されて表出されたとも考えられる。四一四三のかたかこの歌においても然りであろう。

集中にももを詠みこんだ歌は七首あるが、この四一三九の歌以外はすべて序詞など修辞上の技巧に用いられている。次の家持の長歌もその例である。

桃の花 紅色くれないいろに にほひたる 面輪おもわのうちに 青柳あやなぎの 細き眉根まよね  
を 咲あみまがり 朝影見つつ 少女をとめらが 手に持もてる 真澄鏡まそ  
二上山ふたがみやまに……藤波の 花なつかしみ 引きよぢて 袖そでに扱入こぎ  
れつ 染しまば染しむとも（巻十九、四一九二）

「桃の花」から「真澄鏡」までが「二上山」を導く序詞となっている。

・やまたちばな——ヤブコウジ科

やまたちばなはヤブコウジの古名で、常緑の低木である。地面を這うように茎を伸ばす。夏七月〜八月に白い花をつけ、秋に実が赤く熟し、春まで残る。山の木陰などに自生する。

## 21、かたかご

もののふの八十少女<sup>やせをとめ</sup>らが汲<sup>く</sup>みまがふ寺井<sup>うへ</sup>の上のかたかごの花  
(巻十九、四一四三)

物部乃 八十嬌婦等之 挹乱 寺井之於乃 堅香子之花

・沢山の少女たちが入り乱れて水を汲む寺の井のほとりのかたかごの花よ。

集中、かたかごを詠んだ歌はこの一首だけである。これには題詞があつて、「かたかごの花を手で折り取った歌」とある。

大勢の少女たちが集まって話をかわしながら水を汲んでいる。まさに井戸端会議といってよからうか。そのほとりに可憐なたくりの群生があるという诗情豊かな情景である。しかし、家持はそれをただ客観的に眺めて詠んでいるのではない。そこに咲いている花をわざわざ手で折り取って愛でながら詠んでいる。

かたくりは朝方首を深く折り曲げた恰好からやがて陽が昇るに従って少しずつ頭を上げ、陽が真上に来る頃にはそり返るように六弁の花びら

を開く。それが寺井のあたりに乱舞するように咲いて実に美しい。あまりの美しさについて手が出たのだろうか。おそらく都では目に触れたことのない花だろう。初めて見る花に感動して詠んだものと思われる。「全釈」の評はこの歌の内容を次のように想像しているのが印象的である。

寺の境内の隅の方に、たんたんと湧き出る清水が湛へてゐる。その後方が直ちに岡になって、ゆるい傾斜面をなしてゐる。そこに美しいかたくりの花が一面に咲いてゐる。美しい里の処女らは、水桶を携へて三々五々相集まつてゐる。ひそひそとささやきあふものもあり、大声に語つて笑ひ興ずるものもあり、時は春、花も美しい。映画でも見るやうな鮮明な場面である。

家持はこの歌の前に、名歌と呼ばれる四一三九の「桃の花」の歌を詠んだり、また越中赴任以前にも都で多くの女性を対象とした甘美な恋情を詠んだりしている。しかし、越中時代に家持が詠んだ女性の歌には絢爛たる豪華さはない。あるがままの美しさを静かに歌に詠む客観的な觀賞の色合いがみられる。それは越中の自然や、風土から来るものか、あるいは家持の年齢、または国守という立場から来るものかわからないが、詠歌の方法、内容に次第に変化がみられるようになったことは確かである。

・かたかご——ユリ科

かたかごは各地でさまざまな方言で呼ばれているが、通称は

皿として使ったことからくる。皿としていちばん適していた植物が「柏」だったからこそそれをカシワといった。ホオの木は本来ホオという名前で、カシワにすると便利だったから、いつしかホオカシワという名前になった。

この歌の前に僧恵行が詠んだ四二〇四の歌は「わが背子が捧げて持てるほがしはあたかも似るか青き蓋」とある。これはわが背子、つまり家持が持っているほがしわ（ホオの木）は葉が大きく放射状についている様子から青い絹を張った天蓋に似ていることから家持を賛美する気持を含めて詠んだのだろう。遊覧の途中の作らしい。

・ほがしは——モクレン科

ホオノキは漢名で、古名はホオガシワ、ホオガシワノキ。この古名は昔はこの葉に食物を盛ったからであろう。

山地や平地の林中に生える落葉高木。葉は大形で厚い。五月頃大きい黄白色の花をつけ芳香がある。樹皮は灰白色。

## 20、やまたちばな

この雪の消残る時にいざ行かなやまたちばなの実の照るも見む  
(巻十九、四二二六)

此雪之 消遣時奈 去来帰奈 山橘之 実光毛将見

・この雪がまだ消え残っている間に、さあ行こう。行ってやまたちばなの実が輝いているのも見よう。

この歌は天平勝宝二年十二月の作で、この年の最後の歌である。実景ではなく、やまたちばなの赤い実が真白い雪に照り映えているいつか見た様を思い出して、雪が消えないうちに見に行こうと人を誘っている。「きつと照り輝いているにちがいない」という想像にも実感がこもっている。植物に対する家持のデリケートな心情がよく表出されているといつてよい。よく似た作に次の歌がある。

消残りの雪に合へ照るあしひきのやまたちばなをつとに摘み来な  
(巻二十、四四七一)

・消え残っている雪と照り映えあっている、あしひきのやまたちばなを土産に摘んできたい。

消え残る雪の中に小さなやぶこうじの真赤な実が雪の白さに照り映えている美しい情景である。天平勝宝八年作だから、都に帰って六年目ということになる。この六年間、家持の身辺にはさまざまなことが起った。聖武天皇が亡くなり、橘諸兄の致仕、家持自身の病氣など相次ぎ、心境も穏やかならぬものがあつたろう。詳述する余裕はないが、二首には微妙な違いがみられる。ただ、家持の目は大きな木だけではなくこうじやぶこうじの実という小さな草木にも注がれているのは、橘諸兄を意識しての橘（たちばな）への注目からだけではなからう。

18、かへ

ほととぎす 来鳴く五月に……見む時までは 松柏の 栄え  
いまさね 尊き吾が君 (巻十九 四一六九)

霍公鳥 来喧五月余……将見時麻泥波 松柏乃 佐賀延伊麻  
佐祢 尊安我吉美

・ほととぎすが来て鳴く五月に……どうかじかに拝見する日までは、松や柏のように元気でいて下さい。尊い母君よ。

題詞によると、坂上大嬢が都の母に贈るために家持が頼まれて作った歌だという。つまり、妻に頼まれて家持が詠んだ代作ということになる。この中に松柏のとある柏(かへ)のみえる歌は集中この一首だけである。松柏は栄えの枕詞として使われている。この長歌にみえる景物はすべて比喩に使われており、家持がことばを飾ろうと意図的にそうしているとの見方もある。松柏は中国では長寿の木だとされているが、松や柏(かしわ)が常緑で、栄えることにあやかっている歌といえる。

・かへ——ヒノキ科のヒノキ、サワラ、イチイ科のカヤの総称で、柏という漢字はカシワと訓む。本来、柏といえは松柏といわれているように短い針葉をもつコノテガシワ、ヒノキ、サワラなどを指していた。カエには榧、柏、栢などの字が当てられている。常緑でめでたいものの代表とされている。

19、ほがしは

皇神祖の遠御代御代はい布き折り酒飲みきといふそ此のほがしは (巻十九、四二〇五)

皇神祖之 遠御代三世波 射布折 酒飲等伊布曾 此保宝我之波

・代々の天皇の遠い昔の御代御代では、この葉を広げたたんで酒を飲んだということです。このほがしわは。

天平勝宝二年四月十二日、家持は国府の人びとと布勢の水海に船遊びをした。布勢の水海は国府から近く格好の行楽地であった。この日も一行の者がそれぞれの思いを八首の歌に詠んだ。家持は二首詠んでいるが、この歌はその中の一首である。い布き折りは難解な句であるが、「代匠記」によると、「射八発語の詞、布折ハシキフリト読ベシ。若ハ射折布ニテアリケムが倒に写サレケルニヤ」とあり、「私注」では「シキは頻の意であるから重ねることであらう」としている。また「全註釈」は、「シキフリは、重ねて曲げて、フリはたわめまげる。ほがしわの葉を重ねて盃を作つて」と解釈している。これらから推察するに、ほがしわの葉で酒を飲むために葉を重ね、折り曲げて盃を作つたのではなからうかと考えられる。中西進は「大伴家持」の中で次のように述べていることに注目したい。

膳という字を「かしわ」あるいは「かしわで」と読むのは、葉を

る。越中では梅は三月に咲くので、三月まで帰って来なかったら一緒に  
 楽しめない。二月中に帰って来るのだつたらいいのにといいことだろう。

うめ——バラ科

中国から六五〇〜七〇〇年頃伝来したといわれている。和名  
 ウメは中国の梅の発音メイから来たとも烏梅から来たともい  
 われる。古くはむめと呼んでいた。

## 17、つばき

奥山の八峰の椿つばらかに今日は暮さね大夫のとも（巻十九、四  
 一五二）

奥山之 八峯乃海石榴 都婆良可余 今日者久良佐祢 大夫之徒

・奥山の峰に咲く椿の、その名のように心ゆくまで今日はゆっくり  
 お過ごし下さい。お集まりの方々よ。

上二句はつばらかにの序となつてゐる。したがつてこのつばきは実景  
 ではない。ただ、奥山の八峰とか椿ということばを使った家持の気持と  
 しては、越中の自然風土の中で、幾重にも連なる山々、その山に咲くつ  
 ばきの花への思いがあつたから詠み込んだのだろう。この前の四一五一  
 には「さくら」が詠まれ、次の四一五三には「花護」が詠み込まれてい  
 るところから、「全釈」は「初二句の序詞は、桜と共に花瓶に挿してあつ

た椿を詠み込んだものらしい。椿からツバラカにつづけた為に、ツバラ  
 カから下へのつづきが少し無理のやうに見える」と述べている。家持の  
 つばきを詠んだもう一首、四一七七の長歌には「……八峰には霞たな  
 びき谿辺には椿花咲きうら悲し春の過ぐればほとぎすいや頻き鳴きぬ……  
 ……」とある。これは池主に贈つたもので、ここで詠まれているつばきは  
 春の山に咲くつばきの花そのものであり、やがてほとぎすの鳴く夏に  
 なることを予期している。

万葉集には「つらつらつばきつらつらに」や「つばきつばらかに」な  
 ど、単に修辞上の技巧として次の句を呼び出すために使われているもの  
 もあるが、つばきの花そのものを詠んだものもある。しかし、「つらつ  
 らつばき」にしても、その葉の照り輝く様子を讃嘆したことばであつて  
 春の野山に咲くつばきの特徴とつばきへの憧憬が込められている。この  
 四一五二の歌も、奥山に咲くつばきの花の盛りを偲んで、その思いを歌  
 にこめてみるとみることも出来るのではなからうか。

・つばき——ツバキ科

和名ツバキの名は厚葉木の意味とも、また葉につやがあるた  
 めともいわれる。本州から九州の海岸近くの山地に生えてい  
 る常緑高木。花は二月〜四月に咲く。園芸種も多いが、単に  
 ツバキという場合は、ユキツバキを含むヤブツバキを指す。

・雪の上に月が照っている夜に、梅の花を折って贈りたいような可愛い児がほしいものだ。

うめの歌が集中に多いことは先述の通りであるが、この歌は「私注」の評「極めて平凡低俗な歌だ。宴席の座興にしても余り芸がなさすぎる」に尽きている。家持も宴席に招かれ、雪月花の歌を即興で詠んだのであろう。同じうめを詠んだものでも、父旅人の次の歌などはさすがに気品があつて名歌にふさわしい。

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

(巻五、八二二)

・わが家の庭園に梅の花が散っている。いや、これは大空から雪が流れてくるのではなからうか。

これは天平二年正月十二日に、当時太宰府長官であつた大伴旅人の館で催された梅見の宴に集まつた官人が一人ずつ梅花を詠んだ三十二首の中の一首、主人旅人の作である。一連の梅花の歌は絵巻物を見るような観があつて見事である。万葉びとはいかに白梅の美しさを好んだかがわかる。

ところで、家持は越中万葉の中で、先の歌のほかに次の二首を詠んでいる。

(ア) 春の裏の楽しき終は梅の花手折り招きつつ遊ぶにあるべし

(巻十九、四一七四)

・春のうちの最高の楽しみは、梅の花を手折り賞美しながら遊宴することであろう。

(イ) 君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわががづらかむ

(同、四二三八)

・あなたの都行きがもし長びくならば、三月に咲く梅や柳を一体誰と一緒にがづらにして身につけたらよいでしょう。

(ア)の歌は、実は太宰府での梅花の歌三十二首の最初の大式紀卿の歌、「正月立ち春の来らば斯くしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」(巻五、八一五)をうけて、いわば追和した形で詠んでいる。題詞にも「太宰の時の春の苑の梅の歌に和ふる一首」と明記されているが「楽しき終」「招きつつ」などの表現からも追和の詠は明らかである。

家持はこの太宰府の宴席には勿論出席していない。開宴の冒頭歌にはそれなりの意味をこめなくてはならない。しかし、家持はこの歌を作つたのは宴の席ではなく「興に依りて作れり」とあるから、一人もの思いにふけっている時に詠んだものである。ただ、気持としては父旅人への思いもさることながら、盛大な宴会の中の梅花の連作を思う時、どうしてもこの大式紀卿の冒頭歌が気になつたものと思われる。「全釈」によると「ハは清んで訓まねばならぬ。楽しきことの限りはの意。フへは終フの名詞形である」としている。だから「楽しきの極みは」とか、「最高の楽しみは」という意味に解釈すべきであろう。

(イ)は久米広縄の送別の宴で詠んだもので、二月二日に宴が開かれてい

(ア) 山吹の花取り持ちてつれなくも離れにし妹を偲ひつるかも

(巻十九、四一八四)

・やまぶきの花を手折っては、それを見るにつけ、私を都に残して越中に下って別れてしまったあなたを懐かしく思っています。

(イ) うつせみは 恋を繁みと 春設けて 思ひ繁けば……………

繁山の 谿辺に生ふる 山吹を 屋戸に引き植えて……………

(同、四一八五)

・この世の人は恋繁きもので、春になると物思いにとられる。……………繁った山の谷に生えるやまぶきをわが家の庭に植えて……………

(ウ) 山吹を屋戸に植えては見るごとに思ひは止まず恋こそまされ

(同、四一八六)

・やまぶきをわが家に植えて、見るたびに物思いがやまず、かえって恋心がつるばかりです。

(エ) 妹に似る草と見しよりわが標めし野辺の山吹誰か手折りし

(同、四一九七)

・あなたに似た草だなあと、見た時から私がしるしを立てて、人にとられないようにしておいたやまぶきの花を一体誰が手折って持ち去ったのだろう。

四首のうち、(ア)は天平勝宝二年四月五日に都に留まっている家持の妻

から送られて来たものであり、その返歌が(エ)である。家持は都の妻の歌に触発されて、(イ)の長歌、(ウ)の反歌を詠んだものと思われる。長歌の結びは「見る毎に思ひは止まず恋し繁しも」となっており、妻に対する強い恋心が表出されている。しかし、長歌、短歌ともに表現上多少の違いはあるが、技法は単調、いささか稚拙といべきだ。

このやまぶきの歌には家持に限らず、実景を歌ったもののほか、美しい花から女の連想や譬喩、あるいは、やまぶきのやにやむのやをかけたものなどの技巧のみえる歌もある。

・やまぶき——バラ科

全国の山野や水辺にみられる落葉低木で、四・五月に小さな黄色い花をつける。語源はヤマフキ(山振)で、枝が弱々しく風のまにまに吹かれてゆれやすいからともいわれている。万葉の頃から広く栽培されていたらしい。

16、うめ

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき児もがも

(巻十八、四一三四)

由吉乃字倍余 天礼流都久欲余 烏梅能播奈 乎理天於久良牟  
波之伎故毛我母



いから寂しい」という歌を含めて三首贈って来たのに対して、家持が応えた四首のうち一首である。(イ)は三月三日の上巳の節句の日に詠んだ三首のうち一首で、上巳の宴を家持の館で催した折、家持が挨拶として詠んだものである。上巳ならばもの花ではないかという意見もあるが、この頃はまだものを花を飾る習慣がなかったらしい。中国では上巳には曲水の宴をしたようである。つまり、この日に人びとは水辺に集まって禊みそぎをしたのである。「全釈」にも「山桜を折って瓶に挿したのである。曲水宴と桃花とはまだ結びついてゐなかつた」とある。

さて、さくらといえば、うめが思い浮かぶ。さくらは日本古来の植物であり、美しい花の代表とされるが、万葉集には四十首詠まれているのに対し、うめは一一九首と、はぎの一四一首に次いで二位である。以下、三位がたへ(たく)一一五首、四位ぬばたま八十首、五位まつ七九首、六位あし五〇首、七位すすき(をばな、かや)四六首、そして、さくら四十首で八位となっている。うめが中国渡来の花であるにもかかわらず上位に位置しているのは、その色香が当時の貴族階級や文化人に愛好されたからであろう。しかし、万葉集には香を詠んだものは一首もない。また、白梅が主であり、平安朝とは逆である。

#### ・さくら——バラ科

山地に生える落葉高木で、中古以降、花といえはさくらを指す日本の代表的な花である。わが国に自生しているさくらには、ヤマザクラ・カスミザクラ・オオシマザクラ・エドヒガシなどがある。ソメイヨシノは葉に先だつてうすい紅色の花

を咲かせるが、これは明治期に広まった園芸種である。

#### 15、やまぶき

山吹の繁み飛びくぐりひすの声を聞くらむ君はともしも

(巻十七、三九七一)

夜麻扶枳能 之気美登毗久々 鶯能 許惠乎聞良牟 伎美波登母之毛

・やまぶきの繁みを飛びくぐって鳴いているうぐいすの声を今頃聞いていられるであろうあなたがあなうらやましい。

先にも述べたが池主との贈答歌の一首で、家持が山桜の花を詠んだ三九七〇の歌の次にこの歌ともう一首を添えて三首池主に贈っている。三九七〇が池主の三九六七に対応していると先に述べたが、この三九七一と同じく池主の三九六八に対応している。この時の病中往復の贈答歌はさくらの花よりもやまぶきが主題となっている。それは家持がやまぶきの花を非常に好んでいたことを池主が知っていたので、特にやまぶきに重きを置いたのかもしれない。また、四一八四から四一九七までの中に四首もやまぶきの歌がみられる。家持の妻からの歌もあり、やはり家持はやまぶきを大変好んだことは事実である。わざわざ庭に植えて眺めたほどである。それらのことに関係のある歌を四首次に挙げる。

・よもぎ——キク科

山野に生える多年草で、地下茎を伸ばして増える。全体が灰白色の綿毛で覆われ、よい香を放つ。

14、さくら（やまざくら）

あしひきの山桜ひと目だに君とし見てば吾恋ひめやも

（巻十七、三九七〇）

安之比奇能 夜麻佐久良婆奈 比等目太余 伎美等之見氏婆 安

礼古非米夜母

・山の桜をせめて一目だけでもあなたと一緒に見たら、私はこんなに恋しく思わないでしょう。

先に「すみれ」の項でも触れたが、家持が越中に赴任した翌年、天平十九年の春に大病をした。その年の二月二十九日、病床から池主へ長歌を贈って以来、二人の往復書簡、歌の応酬が三月五日まで数回にわたって続く。このさくらを詠みこんだ歌は三月三日に、池主へ贈った長歌に添えた反歌三首のうちの一首である。しかし、内容からみて、この前にある次の池主からの反歌に応えたものともいえる。

山峽に咲ける桜をただひと目君に見せてば何をか思はむ

（同、三九六七）

・山あいに咲いている桜を、ただ一目だけでもあなたにお見せすることができたら何の物思いもありません。

池主からの短歌二首に対して、家持は長歌一首、反歌三首を書簡付きで贈っているが、内容はいかにも男女の恋歌に似ていて、二人の心の深さが理解できる。つまり、先に池主が「私があなたにお見せすることができないので物思いをするのです」と言ったのに対して、家持は「一目だけでも一緒に見たら私もこんなに恋に苦しんだりほしくない」と応えている。「やまぶき」の項で後述するが、三九七〇の次の家持のやまぶきとうぐいすを詠んだ三九七一は池主の三九六八に対応している。

越中万葉のうち、家持のさくらを詠んだものはこの他に次の二首がある。

(ア) わが背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ね（巻十八、四〇七七）

・あなたが以前住んでいた昔の家の垣根の中の桜の花はまだつぼみです。一目見に来て下さい。

(イ) 今日のためと思ひて標めしあしひきの峰の上の桜かく咲きにけり（巻十九、四一五一）

・今日の宴のためと思つて心にきめていた山の峰の桜がこんなに美しく咲きました。

(ア)の歌は池主から「越前のさくらは今が盛りだが、あなたと一緒にでな

アヤメであると考へられる」としてゐるのが注目される。

・あやめぐさ(シヨウブ)——サトイモ科

あやめぐさは現在のシヨウブで、強い香気がある。これが邪気を払うとして五月五日の節句に頭に巻いたり、軒先にさしたり、浴湯に入れるなど古くから用いられている。

あやめぐさは菖蒲草と書かれているが、菖蒲というのはサトイモ科のセキシヨウの漢名である。シヨウブの葉がこのセキシヨウに似ていたのでシヨウブにこの漢名が当てられた。さらに、これが美しい花をつける菖蒲という意味で、あやめ科のハナシヨウブにまで使われたので紛らわしくなっている。水辺に群生する多年草で、地下茎に芳香がある。花季は初夏。肉穂のような淡い黄色の花をつける。

### 13、よもぎ

大君の 任のまにまに 執り持ちて……ほととぎす 来鳴く五月の あやめぐさ よもぎかづらき 酒宴 遊び慰ぐれど 射水川……(卷十八、四一—一六)

於保支見能 末支能末々々 等里毛知氏……保止々支須  
支奈久五月能 安夜女具佐 余母疑可豆良伎 左加美都伎 安蘇  
比奈县礼止 射水河……

・天皇の任命のまにまに役目に従つて……ほととぎすが鳴く五月のあやめぐさや、よもぎをかづらにして酒宴をして遊び慰めるけれども、射水川の……

よもぎの歌は集中この家持の歌一首だけである。題詞によると、久米広繩が都での任を終え、帰任した時に家持が館で酒宴を開いて歓待した時の歌となつている。家持のはなやぐ気持は理解できるが、この歌に対する評は「全註釈」「全釈」「注釈」ともにきびしい。「私注」では次のように述べている。

家持のこの作は外面的形式的な修辞のみが目立つて、内心の感動という程のものは見えないやうである。これはさうなるのが自然で、かうした空気の中からも、本気な作品は生まれてもよい筈だが、生まれぬ場合の方が多いのである。時代の生活も作品も、やうやく末期的症状を呈して居ると言つてよいだらう。

当時は、よもぎもあやめぐさやたちばななどと一緒に一つの緒で貫いてかざらにして頭髮に飾ることが呪術習俗として年中行事化していた。これは元来、中国の民俗思想であつたものが当時すでに伝来していたものと思われる。家持の歌にこうした風習の歌がよくみられるのは、家持が都での宮中行事として行われていたことを思い、自然の豊かな越中にあつて、自らあやめかづらやよもぎかづらを身につけて、しばし都への郷愁にひたつていたからだらう。

ぎすと組み合わせで詠まれたり、かざらと組み合わせたり、あるいは、はなたちばな、よもぎなどと共に詠まれたりしている。季節との取り合わせであろうが、いささか常套的ではある。しかし、これはあやめぐさに限ったことではない。植物が身近かなものであったから、ふと口ずさむ歌にも詠みこまれたものと考えられる。

ほととぎすとの関連で詠まれているものは越中万葉の九首のうち八首ある。ほととぎすは、うのはなの咲く頃に鳴き、やがてあやめぐさも咲くので、季節的には四月から五月の初旬という頃になるうか。万葉びとは季節に敏感であった。草花を愛し賞でた家持は越中という鄙の地にあつて、とりわけ、さまざまな花が咲くことで季節の推移を知り、感興を覚えたものと思われる。

あやめぐさ珠貫くというのは、あやめぐさを葉玉（くすだま）に貫き通すということで、当時の風習として邪気を払ういわれのあるあやめを五月五日の節会に葉玉に通したのである。生命力や呪力を備えた植物を身につけたり、家に飾ったりすることにより、心身の活力をよみがえらせたり、家運をよい方向に導いたりするという習俗は在来のものだが、あやめぐさを用いることは恐らく中国の民俗から来たものだろう。次の(ア)は田辺史福麿の歌で、(イ)・(ウ)は家持の作であるが、いずれもあやめぐさとかざらを取り合わせている。やはり、邪気を払うために身につけたものと思われる。

- (ア) ほととぎすいとふ時なしあやめぐさかづらにせむ日此ゆ鳴き渡れ  
(卷十八、四〇三五)

・ほととぎすよ、いつといつて不快に思う時はない。しかし、どうせ鳴くならとくにあやめぐさをかざらにして遊ぶ日にここを鳴いて渡ってくれよ。

- (イ) ほととぎす今来鳴き始むあやめぐさかづらくまでに離るる日あらめや(卷十九、四一七五)

・ほととぎすがようやくやって来て、鳴き始めた。あやめぐさをかざらにする五月五日までこの鳥と別れる日はないだろう。

- (ウ) 春過ぎて 夏来向へば あしひきの……………あやめぐさ 花桶を 貫き交へ かづらくまでに……………(四一八〇)

・春が過ぎて夏が近づくと……………あやめぐさと花桶を混ぜて一緒に貫き、頭につけるかざらにする時まで……………

かざらについて、西村真次は「万葉集の文化史的研究」で、「起源を云へば恐らく生命を長らふる為の呪術的行為であつたらうけれど寧楽時代にはもはや裝飾が主であるところの、いくらか呪的意義を伴つた年中行事の一つとなつてしまつた」と述べている。なお、あやめの表記「安夜女具佐」について「全註釈」は「字音仮字の中に交えて、メだけが女の字を使つてゐる。これは訓仮字とも取れるが、他にこの字を訓仮字に使用してゐないので、表意文字として使用してあるもののやうであつて、それならばアヤメに漢女の義を感じてゐるのであらう。この花の美しさを漢女に比しての名であらう。さうすればこれはあやめ科の花の美しい

(四〇八七)

・燈火の光に映えて見えるゆりの花、その名のようにこの後も皆で逢おうと思いはじめました。

(イ) さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ  
(四〇八八)

・この後もまた逢おうと思うからこそ今も親しくするのは。

(ア)は同席していた内蔵繩磨の作であるが、ゆりで後(ゆり)を引き出している。家持は(イ)の歌で、(ア)を補足した形でこの場をまとめている。

(ア)共に枕詞としてのゆりであるが、もう一首は「庭中花作歌」(巻十八、四一一三、四一一四、四一一五)の中の二首、四一一三の長歌と、四一一五の反歌にもそれぞれ「さ百合花後も逢はむ…」と詠んでいる。いずれも家持の作である。

さて、四〇八六の歌で特徴的なところはあぶら火の光に見ゆるであろう。家持はゆりの花のかずらが燈火の光にきらきら輝いている美しさに真に感動している。まさに家持の美意識を象徴しているような表現といえよう。さらに、燈火をあぶら火と表現するなど、いかにも詩人らしいといふべきだろう。

なお、四一一三の長歌に「…夏の野のさ百合引き植えて咲く花を…」とあるところから、家持が夏野に生えているゆりをわざわざ庭に移し植えて眺めていたことがわかり、家持がいかにゆりを賞でていたかを知ることが出来る。このゆりは野に咲く可憐なササユリであろう。

・ゆり——ユリ科

ゆりには、ササユリ、ヤマユリ、カノコユリ、ヒメユリなど十数種類ある。万葉集にさゆりと詠まれているのはヤマユリかササユリであろう。ゆりは多年草で地下にユリ根といわれる鱗茎がある。花の形はろうと状、盃状など多様である。

12、あやめぐさ

高御座 天の日嗣と 天皇の 神の命の 聞し食す……  
卵の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめぐさ 珠貫くまでに…… (巻十八、四〇八九)

高御座 安麻乃日繼登 須賣呂伎能 可未能美許登能 伎己之乎  
須……宇能花乃 佐久月多弓婆 米都良之久 鳴保等登芸須  
安夜女具佐 珠奴久麻泥余……

・高御座にまします天の日嗣として、天皇の神の命がお治めになる……  
……うのはなが咲く四月になると、好もしく鳴くほととぎすは、あやめぐさを薬玉に貫く頃まで……

集中にあやめぐさを詠んだものは十二首ある。そのうち、九首が越中万葉にあり、家持の作が八首もある。この長歌も家持がひとり室内にこもっていて、たまたまほととぎすの鳴き声に触発され、遙か都へ思いを馳せて詠んだものであろう。あやめぐさは長歌、短歌を問わず、ほとと

# 越中万葉における植物詠歌考 (下)

—— 大伴家持の歌をめぐって ——

A Study on the Poesy by Otomono-Yakamochi  
— on the Flora in "Etchu Manyo" —

霜野 仁 一

SHIMONO Jinichi

## 11、ゆり

あぶら火の光に見ゆるわがかづらさ百合の花の笑まはしきかも  
(巻十八、四〇八六)

安夫良火乃 比可里介見由流 和我可豆良 佐由利能波奈能 恵  
麻波之伎香母

・ 燈火の中に見える私のかづら、このゆりの花がまことに美しくほ  
ほえましいことである。

天平感宝元年五月九日、秦伊美吉石竹の館で酒宴が催された折、主人

の石竹が、ゆりの花かづらを三枚作って、これを器に重ねて来客に捧げ  
た。主人のこの雅趣に応えて、家持らが歌を詠んだ。その第一首がこの  
家持の歌である。かづらは本来、無事を祈るまじないで作られるもの  
であるが、それをさ百合、つまり神聖なゆりの花で作って持つて来た主人  
の粋なはからいに感謝しているのである。ゆりの花を笑まはしきと詠ん  
でいるのは次の歌にもみられる。

道の辺の草深百合の花咲みに咲みしがからに妻といふべしや  
(巻七、一二五七)

・ 道のほとりの草深ゆりの花の咲くように、ちよつとほほえみかけ  
ただけで、妻であるというべきでしょうか。そんなことはありま  
すまい。

集中、ゆりを詠んだ歌は十首あるが、そのうち、越中万葉には六首も  
あり、家持の作は五首である。五首の中で、このようにゆりの花の咲き  
ほころぶ美しさを「ほほえむ」と、人間の笑顔にたとえているのはいか  
にも巧みな比喻表現であるが、そのように詠んでいるものはこの四〇八  
六と四一一六の長歌に「大君の任のまにまに…夏の野のさ百合の花の花  
咲みに…」の二首だけである。あとの二首はいずれもゆりの花を「後  
(ゆり)」の枕詞として使っている。

次の二首はこの四〇八六に続くものである。

(ア) 燈火の光に見ゆるさ百合花後も逢はむと思ひそめてき